

『女任侠！ 秋実ちゃん』



玉子王子 著

一章 レ〇ブ魔ちゃん

「姉貴」

小さなオフィス。応接室には神棚。提灯。水牛の角のオブジェ。いかにも怪しい。

そして外には**初代にゃんこ会**という看板。

女ヤクザの事務所だった。

ジャージ姿の女が二人。なかなかの巨乳の持ち主、あまり化粧っ気はない。一人は赤髪ロング、ソファに深々と座り、一人は金髪ロング、浅く座っている。

二人ともどことなく荒っぽいか、がさつそうな空気を漂わせている。

その浅く座っているほうが少し年上の二〇代前半という感じの女に声をかける。

「喧嘩強くなるにはどうすればいいんすかねえ？」

「んー、そりゃ、二つだな」

立ち上がる赤髪ロングヘアー。

「秋実、ちょっとやってみるか」

「いいんすか？ ウチ強いっすよー」

冗談めかしつつも、割と本気な金髪ロング。

巨乳ジャージの二人が向き合う。

と、赤髪ロング、瑠香が下がる。

ソファの向こう側へ。

「いきなり逃げるんすか」

そんなわけもないだろうが、広い場所に行くつもりかと後を追う秋実。

ソファの向こう側に入る。

と、瑠香が止まり、急に距離を詰める。

「あっ」

足を引き、受け止める態勢になろうとするが、真後ろにソファがあり、引けない。

大した力も入れずに瑠香が押す。バランスを崩した秋実がソファの上に崩れる。背もたれを超え、座る場所に背中から落ち、そのまま転がって机の上に。

「どわっ！ あっ」

素早く近づいてきていた瑠香が髪の毛を掴み、膝蹴り。と、顔面に当る前に止まる。

「と、これで終わりだな。机がなけりゃ、頭にサッカーボールキックになる。頭が高い位置だったから、掴んで膝蹴りになった」

「えー、何すか今の」

髪の毛を放されたので、机の上に座る秋実。頬を膨らませる。

「押しただけじゃないっすか」

「格闘漫画みたいにやれってのかよ。そんな細かいことやれる空間がいつもあるか？」

「でもなあ」

不満げに立ち上がる。肩をすくめる姉貴分。

「今のが本物の喧嘩だよ。地形を生かすんだよ。ま、これは女相手の奴だけだな」

「じゃあ男相手だと？」

「はん、別に何か考える必要ないだろ。男なんて……」

パン、と掌で掬い上げる。ジャージの股間。

「あっ」

「こうやってキ○タマ打って、握りしめて突き倒してやればゴリっというて、あは、どんな強い奴だろうと泡吹くぜ。というより、男の「強さ」なんて幻想だよ。だって男は……」

何もない秋実の股間で何か握る形だけする。

「ここにキ○タマが付いてるからな、タマタマボールが二個」

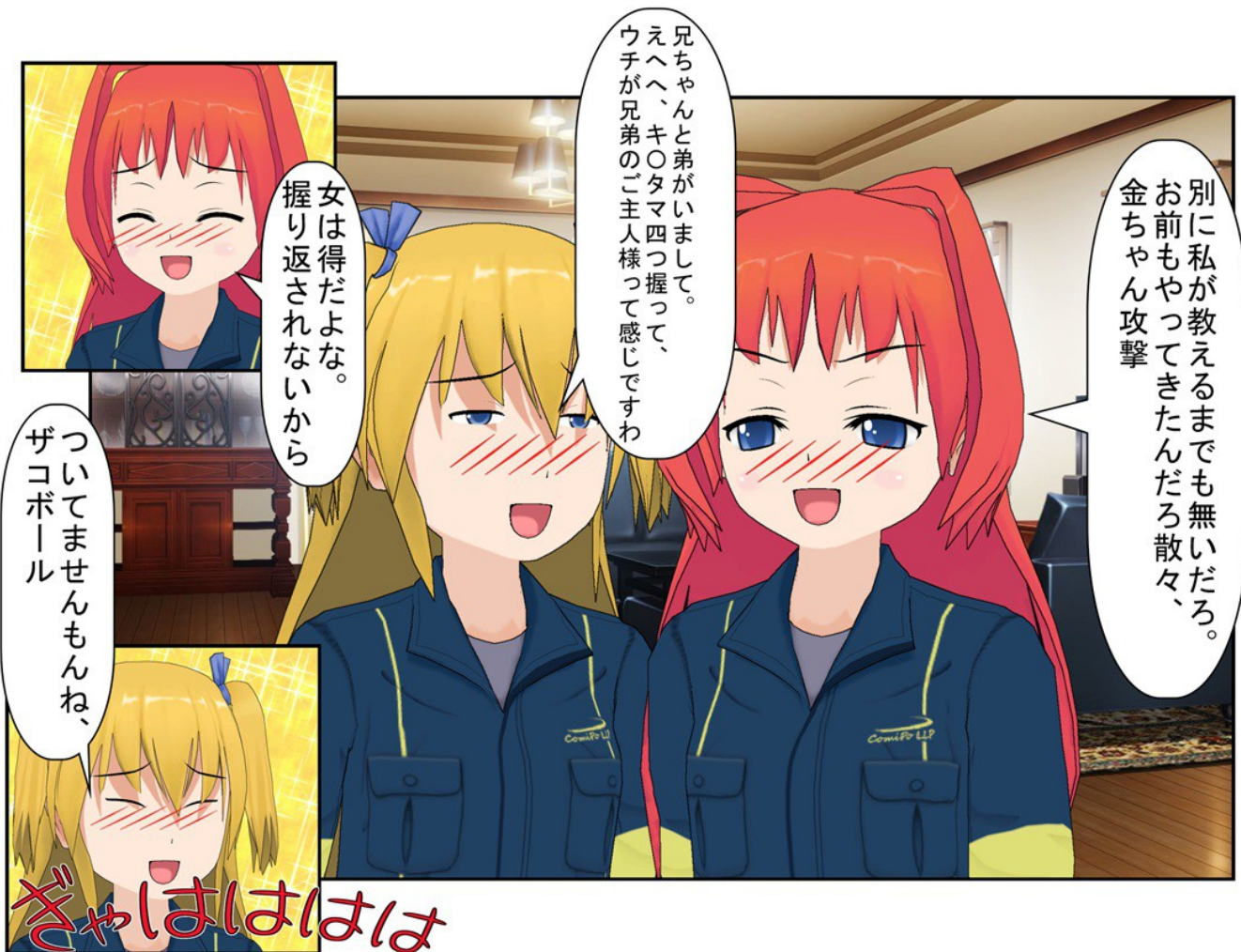
「あはは、確かにそうっすね。今でも、男なら「はぐう」とか言って、踊りだしますもんね」

「別に私が教えるまでも無いだろ。お前もやってきたんだろ散々、金ちゃん攻撃」

「兄ちゃんと弟がいて。えへへ、キ○タマ四つ握って、ウチが兄弟のご主人様って感じですよ」

「女は得だよな。握り返されないから」

「ついてませんもんね、ザコボール」



にんまり笑い、股間に指で輪を二つ作る秋実。瑠香も同じようにして、特有の弱点を持った者たちを圧倒的優越感の中で見下す。

見たまんま喧嘩っ早い二人は、幼いころから散々その弱点について男たちを悶絶させてきたのだ。

部屋の扉が開く。

振り返り、誰が来たか確認するとサッと頭を下げる二人。

「おふくろ、お帰りなさい！」

「はい、ただいま」

数人の女たち。その先頭、ふんわりした上品そうな熟女。着物だが、あまりに合わない。乳房が巨大すぎる。爆乳熟女である。眠そうな目付きが色っぽい。年齢は四〇歳だが、見た目は三〇代半ばぐらいで、もちろん二人の実の母親ではない。

秋実が茶を入れる。一緒に入ってきた女たちの分も。

スーツの女や、二人同様動きやすいジャージの者もいる。

茶を出す秋実に微笑む熟女。

「なかなか面白いことになりましたよ」

「今日はどんな御用で？」

「うちのシマでね、女の子に体売らせるのは全然オツケーなんだけど、薬漬けでお金吸い上げてる悪い店があったから……うふふ、雅美ちゃん相変わらず怖いわー、店長さんの……キ〇タマ握り潰しちゃったの。一〇回ぐらいよ？」

ナノテクノロジーが発達し、どんな怪我でも完全に治してしまえる世界。睾丸ぐらいなら一〇秒と立たず再生できるので、何度でも破壊できる。が、男には無理な話だ。自分についているので、どうしても自分の身に置き換えて想像してしまう。

その点、女たちは平気だ。ついていないので。

というわけで、秋実たちのような女ヤクザというのは男にとっては相当恐ろしい相手といえる。

ジャージの、体格のいい女。秋実と同じぐらいの年。

雅美が快活そうに笑う。

「自分、キ〇タマ潰し好きなんで」

「こらこらー。私も好きだけど、それはだめでしょ」

「間違いました、薬漬けとか、任侠道的に許せませんでした。という**歴史認識**で行きます」

「そうそう、建前は大事よ？ 私もタマタマやられた男の人が転げまわる姿見ると**大事なところがキュンとする**けど、表立って言わないわ」

勉強になります、と女たち。話を合わせているわけではなく、みな玉責めで多少の差はあっても濡れる側の女たちだ。睾丸を持つ側の生き物にとって危険すぎる集団といえる。

トイレに立つ秋実。

気づくと、後ろに雅美がいた。胸はあまりなく、背が高い。薄い金髪でおかっぱのようなショートカット。モデルというよりアスリート風といえるだろう。

「秋実、電話番ご苦労」

「あんたにご苦労とか言われる筋合いねーし」

「いや、電話番の大変さはわかるよ。私もやってるから。まあ私は最近仕事にも連れてってもらえるけどな」

眉を顰めて振り返る秋実。雅美の頬が赤いのに気づく。

「それ」

「瞳姉貴に殴られた。厳しい人なんだよ。まあ私らみたいなのは、殴られないとわかんねーもんな。その点、瑠香姐さんはいい人だよな。あんたみたいなボンクラにはもったいないよ。でも、ちゃんと殴って育ててもらわないと、ボンクラはいつまでもボンクラっしょ」

「あ？ 誰がボンクラだと？」

「一緒に入って、今だ仕事にも連れてってもらえないどっかの誰かでしょうが」

顔が引きつる秋実。雅美も同じように引きつる。怒っているというより、威嚇のためにそれっぽい顔を作っているという面が大きい。

睨み合う。背丈の差で、上下から。

と、膝。

ボス、と秋実の膝が雅美の股間に入る。

「あ？ なんだこら」

「いて、なんだこの野郎！」

ボスボスと、本気ではないが膝で蹴りあう二人。

全く本気ではないが、どちらかが男なら、一発蹴られた時点で勝負ありである。

本気で喧嘩するわけにもいかないが、手は出したい。

だからお互い、大して聞かない攻撃をし合っている。

股間への膝蹴りという、女にとっては大したことない攻撃を。

マン蹴り合戦。

しばらく蹴りあうが、いつまでもやっても仕方ない。

「っていうか、ションベンしたいんだけど」

「じゃ、この辺にしといたるわ。漏らされても困るしね」

「漏らすならあんたにぶっかけるわ」

「やめろや。っていうか、女でよかったわ私」

「ああ、確かにウチもそう思うわ。今のやり取りで、男の子ならもう気絶してんじゃね？」

「っていうか、「やり取り」できんなあ。はじめの一発でノックアウト。デッドボールでツーアウトで試合終了だ。試合っていうか、男終了」

「こうしてみると、男の子同士って本当に信頼しあってるよねえ。ガンつけ合って、もしどっちかがタマタマ蹴りに来たら終わりじゃん。お互い相手の命握ってるも同然でよく密着できるわ、ウチが男なら怖いから無理だわ」

「まあ自分が蹴っちゃうと、次の時蹴られちゃうかもという恐怖が歯止めになってんでしょね。その点……」

「ウチら、金ちゃんないしね、安心して密着できる」

笑いあう。仲がいいのか悪いのかよくわからない二人。

まあ良くもない、仲がいいなら股間を蹴りあうわけもない。しかしそれほど悪いわけでもない。というか、同じ組の下っ端構成員同士でそれほど仲が悪いことは許されないだろう。上に怒られる。

だからそこそこなあなあで済ますべきと、お互い思っている感じか。

トイレに入る。洋式便器に座り、丸出しの股間を撫でる。

「いって一、女でもやっぱりここは頑丈じゃねえんだぞ。ボコボコ蹴りやがって。まあ男と比べたら無敵の強さだけだな」

言いつつ、ため息をつく。

——あー、ウチも早く仕事に連れて行って欲しいわ。事務所で格闘訓練だの護衛の心得だの礼儀作法だの他の組織の人の顔覚えるだのって勉強ばっかじゃん。ここ学校？ おかしくね？ そういうの嫌いだからこっちに来たはずなのに……

必要なことはわかる。

他の組織の人間に下手な対応を取られれば殺し合いになりかねない。そうならないように済ますには金だ。サラリーマン社会なら謝れば済むかもしれないが、ヤクザ社会となるとなんでも殺し合いだの金の話になる。

だから並みの会社より礼儀をまずは叩き込まれる。

その辺姉貴分の瑠香から聞いているので納得はしているが、同期が仕事に出だせば焦りも出る。

「それじゃ、電話番号は雅美ちゃんが代わるから、今日は秋実ちゃんは帰っていいわよ」

「ありがとうございます！」

「それじゃ、私も失礼します」

事務所を出る赤髪と金髪の二人。

道を歩く。

「薬やらせるとか、外道がいるもんだな」

「正直、治っちゃうんだから金潰しぐらい軽いっすよね」

「別に金潰ししかしてないわけじゃないだろ。ケジメとして金も請求されるはずだぞ」

「あは、タマタマは潰される、お金は取られる、男はつらいっすね。女なら金潰しは無しでラッキーですわ」

「まあ、ボコられることはボコられるだろうがな」

「わー、ボコられるのはいやだなあ。玉潰しのほうが絶対楽」

「いや、玉無いからわからんだろ」

「ここだけの話、いっつも威張ってる男が、キ○タマ蹴られて「あぐっ」とか言ってるの、見るの最高に気分いいんっすよ。濡れるんすよ。彼ピ気の弱いオタク系なんで、全然威張らないんですけど…それでもやっぱり玉蹴ったら濡れるんすよ」

「金蹴り好きなだけだろ！ 私も大好きだけどな。うちのボンクラ「玉だけは許して！」とかいうくせに、チ○コはビンビンになんだよ、蹴ってやると」

ここはうさぎ県、世界一ドS女子の割合が多いと噂される土地である。

「ぎゃははは！ うちの彼ピと同じっすね！ 嫌なのか気持ちいいのかどっちだって話ですよね！」

「いや、これが「気持ちいい」というのとは違うみたいだぞ。「興奮する」ってのが実際のところらしい。嫌で痛くて、でもなぜか興奮してギン立ち。必死で嫌がるのを、無理やり女に玉狙い撃ちにされるのが興奮するとか」

「ドMやべー！」

姉貴分の彼氏をそういうふうに言っているのかと思うが、別に瑠香は気にしない。

と、コンビニに差し掛かる。

見るからにヤンキー風の男たちが五人ほどたむろっている。

年寄りが入りにくそうにするが、気にする様子はない。通りかかる猫に空き缶を投げつける。

眉を顰める瑠香。

「秋実、ちょっと喧嘩の練習してみないか？」

「いいっすねー」

にんまり笑い、近づく秋実。

躓く。

ヤンキーらはだらしなく胡坐をかいている。その足に引っかかる。

「あっ、邪魔だろお前ら！ どこに座ってた！？」

ここで、「あ、すみません」と引けば、押して喧嘩とはいかない。

無理やり喧嘩を売りに行くのも違うと思うのだ。秋実も、瑠香も。

——こっちはヤクザ。相手はタマタマ付いてるから筋力や体格では上だろうけど、素人は素人。無理やり喧嘩売りに行くわけにもいかんだろう。とはいえ、こういう輩は……

瑠香が考えている間に、立ち上がるヤンキーたち。

「おいおい、オッパイちゃんよ、人蹴とばしておいてなんだこら」

「これはお詫びでしょうお詫び、そのオッパイでお詫び」

「とりあえず、上着をさあ」

首のあたりを掴み、ジッパーに手を伸ばすヤンキー。

詰まらなそうな顔で膝を押し出す秋実。ぐによ、と軽い衝撃。

「あぐっ！ あおおおおお！」

へコッと腰を引き、目を見開くヤンキー。

「あ！」

驚く男たち。関係ない通行人も、男は愕然とし、女たちは**ちょっと楽しそうに驚く**。

もちろん、女ヤクザ二人は心から楽しそうだ。

残りのヤンキー四人が震える。

「お、お前何を！」

「あーらら、これで終わり？ 大変だなあお前ら、変なもん付いてると」

「なにを……」

「いや、だから……」

指。

両手でリングを作り、股間の前にやる**睾丸しぐさ**。

しつつ、膝も開く秋実。

「お前ら、これついてて大変ですねー、って言ってんだよゴラア」



「な、この女」

顔を赤らめるヤンキーたち。

一様半年ほど前に高校を出た秋実より少しだけ若い。年上女性の性的な手つきに驚く。いや、年上と正確に認識しているかは微妙かもしれないが。

その恥ずかしげな表情ににんまりしながら指を小さく左右に揺らす秋実。

「あはは、ほらほら、弱点じゃくてーん。ついてんだろお前ら？ っていうか、女性の服とか体に不用意に触れてんじゃねーぞ、キ○タマ潰すぞゴラ。そいつみたいになりたい？」

「くふううう」

股間を押さえ、腰を引く。痛みを少しでも和らげようと、腰をグネグネと振る。

「女の子に金ちゃん蹴られて腰を振る。ううふふ、蹴るって言っても、押したぐらいなんだけど……まあタマタマ相手なら十分とわかっててやってんだけどな」

「ふざけやがって！ こいつぶちのめして拉致るぞ！」

「仲間も呼んでみんなで、ぐっ、はほっ！」

パシ、と軽いジャブを鼻っ柱に食らい、のけぞるヤンキー。注意をそっちにとられた隙に、爪先でペンと股間を持ち上げられる。

瞬時に腰を引き、股間を押さえるがもちろん遅い。

「はふ、はう……うほおおお」

悶える男の顔を覗き込む秋実。

「あははは、金ちゃん痛い、痛すぎる、ゴールドボールが……おっと！」

「おらああ！ あ、はぐっ！」

殴り掛かった男。素早く横にかわしつつ、すれ違いざまにパンと股間を手のカップで打つ秋実。

姉貴分に喧嘩のやり方など聞く必要がないくらい手慣れている。とはいえ、姉貴分のほうがはるかに上手なのでやはり聞く意味はあるといえはるか。

ともかく、この場では圧倒的に優勢なのは間違いなかった。

三人が股間を押さえてその場に立ちすくみ——金的巧者の秋実は倒れない程度に加減してやっていた——残りの二人もキュンキュンに股間が縮む。

胸を張り、手を腰にやる秋実。

「あっはっは一、お前ら、ビビってんだろ？」

「誰がビビるかよ！」

「縮み上がってんだろ？ おチン○ン。まあお前らみたいなオラついた野郎は大体元から小せえんだけどな」

「なっ」

凶星の男たちが顔を赤らめる。

と、その一人に踏み込む秋実。

「あ、このっ！」

逃げたかったが、とっさにそれは難しかった。そこで、喧嘩慣れしたヤンキーはむしろ進み、秋実に組み付く。組み付いて、膝蹴り。ボス、と勢いよく股間を蹴りつける。

「うぐっ！」

「へへ、どうだっ！」

「く、この……いてーんだよ！」

同じくヤンキーの服を掴む秋実。

「あ、おぐ！」



ボス、とヤンキーのそれよりは筋力や体格の問題で威力が出ない膝蹴り。しかし、反応は全く違う。

「あごあああああ！」

絶叫、内股になり、掴みかかった手を離して股間を押さえようとする。

が、それよりも早く、第二撃。

「おらっ！」

「あがっ！ ぐむっ！」

次々膝蹴り。女の膝が睾丸を押し潰す。

「あんがあああ！ あがっ！ あがっ！」

「オラオラ！ 女の股間蹴るとかいい度胸してんなあ！ 同じところぐっちょんぐっちょんにされると思わねーの？ らあ！」

ボス、ボス、ボス、と連続で膝蹴り。

と、ヤンキーが泡を吹いているのに気づく。

「おっと、やり過ぎた。玉潰れたかな？ んー？ んー？ 悪いことしちゃたねー」

舌を出しつつ、顔を覗き込む。悪い事したとは**微塵も思っていない**ことは見ればわかった。

「大丈夫、ナノ薬ですぐ再生すっから」

手を離すと、その場に落下するように崩れるヤンキー。完全に意識がない。

見た目は荒っぽいが、根はやさしい秋実が股間蹴りに怒りつつも、なお年下らしい素人男子に思いきりの膝金はできなかった。とはいえ、さほど手加減もしていないが。

あまり深く蹴り込まなかったのも、腰骨と膝の間に玉が押し潰されることもなかった。ヤンキーの両睾丸は急速に腫れ上がるも、潰れてはいない。

それでも、十分に意識を失うダメージだった。

見下ろす秋実。

「正直こいつの蹴りのほうがかなり威力あったんだけどねえ。まあ……」

パン、と自分の股間を叩く。

「体の構造が違うから、この結果は仕方ないかな？」

数発膝蹴りを見舞った秋実ではあったが、別に始めの一発で十分勝ちではあった。

股間の蹴りあいでは男は女に勝ち目はゼロ。

「う、わああああ！」

最後の一人が踵を返す。

真っ青になる仲間たち。女に急所攻撃を受けて動けない状態で仲間には逃げられては絶望しかない。

「あ、待てよ！」

「に、逃げんな！」

「きゃははは！ 仲間がよんでますよー？ おチン○ン王国の同志たちがよんでますよー」

「ざけんなクソマ○コ！ 玉ばかり狙いやがって！」

喚きつつ走る。

その前に、スッと差し出される足。

溜香。

すっ転ぶヤンキー。

「うわああ！ ひ、ひいい！ やだあああ！ おわっ！」

何とか立とうとするところを横から蹴とばし、仰向けに倒れた所を踏みつける。

「わわわ、あ、おぐっ！」

「キ○タマはこうやって踏みつけられるとすぐ潰れるから気をつけろよ男子」

「や、やめああああああ！」

体重をかけ、足首を左右にまわしてみっちり磨り潰しにかかる。うつむく体勢で巨乳が重力に引かれてゆさゆさ揺れる。揺らしつつ、涎が垂れるのを舌で舐め取る溜香。

「ぐりぐりぐりー、タバコを踏んで火を消すように**足でコーガン磨り潰す**」

「ぎゃははは！ 姉貴容赦ないっすね！」

手を叩くと、巨乳がプルンプルン揺れる。

「仲間見捨てるような奴は男じゃないからなー。じゃけん睾丸潰しましょうねー、ってこった」

「ああああああああああ！」

「うるせー、治るんだから我慢しろ。男だろ」

「今、男じゃないかもしれないっすよ」

「あは、そうかもな。それじゃ」

最後にグイっと股間に体重をかけてから、白目を剥いて泡を吹くヤンキーの頭の横にしゃがむ。

「おい、大丈夫か？ うふふ、この……玉無し、玉無し、玉無し。この玉無し。キ○タマを、女に踏まれて玉がない。今日からお前は男じゃない。コーガン女に潰されて、エッチもできないチ○ポも立たん。チン○ンあっても玉がない、男の証のボールがない。ないないないない、玉が無い。大事な男のボールがない」

去勢嘲笑。周りの男たちが震える。今だ、股間を押さえて動けない。意識がない聞かされている本人も、顔を歪める。いくらかは伝わっているのか、睾丸が潰れた苦痛なのだろうか。

「うふふ、まあ、こんなもんかな」

立ち上がる瑠香。

「えー、お前ら、なんでこういうことになったのかわかるな？」

「それは……あんたらが金貢め大好きなドSだから……あ、ちょ、ちょ！」

「はい、ウチらを女だと思って見下してディスりました。罰としてキ○タマ没収」

爪先金蹴りで動けなくなっていたヤンキー。

秋実近づかれ、慌てて踵を返す。金的ダメージで動きたくないが、玉がかかっているとすれば動ける。

半端に内股状態で歩くのでよろけつつ、逃げる。が、すぐ追いつかれ、背後から抱き着かれる。

片手は胴体、片手は股間。

ギュム、と容赦なく掴み、指を睾丸に減り込ませる。

「あおおおおお！ ちょ、やめ、やめえええ！」

「こうやって背後から抱き着かれた時の対処法教えてやるよ。腰を横にずらしてな、こう、手でカップ作ってパン、と股間に叩き付けるんだ。そしてぎゅっとタマタマを握って、男の急所を握り潰す！簡単で効果的だろ？ あははは、ただし……」

ぎゅ、ぎゅ、ぎゅ、とヤンキーの股間を握り潰す。のけぞるヤンキー。

「ああああああ！」

「これがついていない、女に抱き着かれた場合は使えない技だな。あははは。お股に急所がないから女は安心、お股に急所があるから男は不安」

「放してくださいっ！ 玉だけは許して！」

「それじゃ、なんでこうなったか言ってみな」

「そ、それはその……お、俺らが悪いから……あああああ！」

「どう悪いんだよ？」

「ひiiiiiiii！」

本当にわからないようだった。

わかるわけがない、「コンビニ前にたむろしていて邪魔だから説教がてら玉潰し」というのは無茶がすぎる。いくら玉が治るとはいえ、男の感覚ではありえない。

だが、睾丸がないという特権的地位に守られ、「玉潰し」が永久に他人事として保障されている女の子様の感覚はまた別のようだった。

まあ荒っぽい業界に身を置いているから、というのもあるだろうが。

「お前らは礼儀知らずで、人に迷惑をかけていた。店の前に座られたら、お客さん入りにくいだろう？」

「そうそう。私たちは大人として、当然の注意をただけ。当然の説教タイム。何か間違ってるかな？」

「すべて正しいですっ！」

「きゃはは、キ〇タマ握れば男は言いなり」

言いつつ、涎を垂らす秋実。

——あー、潰してえ潰してえ、このまま金の玉潰してえ。可愛いよこいつのキ〇タマ。小さくてしっかり手に収まっちゃうよ。ズボンの上からでも余裕で二個ともぶちゅつと行けちゃうよ。ああ、潰したい潰したい。最近潰してないもん。最後に潰したのは……あ、今朝、彼ピの潰したんだったわ。でも、やっぱり潰したいよー、おマンマン濡れてきちゃったし、これはもう潰すしかない。ほんとは彼ピの潰したいけど、ここにはないからこれでいい、妥協する！

睾丸を揉み潰すうちにメス顔になってくるドS女ヤクザ秋実。

妥協で潰されるのは文字通りたまったものではないが、好きだからと彼女に潰しに来られるのもやはりたまったものではないだろう。同棲していれば寝首を搔かれるというか、**寝玉を握り潰される**のは防ぎえないのだし。

「秋実、止めな」

「はい姉貴」

ヤクザである、上の者に真剣にやめろと言われれば即座に止める。

秋実が手を離すと、その場に崩れるヤンキー。

股間を押さえ、体を丸める。

「ぐむうううう、ふざけええええええ」

「ちょっと、あなたたち何してるの？」

婦警が二人。このうさぎ県では、警察はみな婦警である。

別に女ヤクザによる金的対策ではない。

「あなたたち、にゃんこ会の人よね？」

「この子らが転んで股間を打ってしまったので、介抱してあげていました。な、君たち」

「違いますう！ このヤクザどもにキ〇タマを蹴られました！」

「あ！」

あっさりと本当のことを言われ思わず姉貴分を見る秋実。

「言ってしまいましたなあ。っていうか、根性あるわこいつら」

「警察が守ってくれると信じてるのね。いい人生送ってきたんだ」

不幸な家庭に生まれたためにヤンキーになり、大人など信じていないというわかりやすい者たちではないようだ。

楽な人生を送っているくせに怠惰やわがままでヤンキーになったという、これもある意味わかりやすい感じの者たちらしい。

というか、秋実自身幸せな家庭で育ったくせに「いい人生送ってきたんだ」もないだろう。

股間を押さえ、婦警たちになじり寄るヤンキーたち。

瑠香に睾丸を踏み潰された一人は泡を吹いて倒れたままだが。

なんだかんだ言っているうちに、瑠香はすでにナノ薬を投与している。カプセル一個を口に押し込むだけだから一瞬だ。玉が潰れたままだと延々ダメージが発生するが、再生してしまえばすでに受けたダメージが残るだけだ。

だけ、といっても女に睾丸を踏み潰された痛みと衝撃はかなりのものだが。

「ふーむ」

妙な場所に出くわしてしまった婦警が呻く。

——面倒なことになったわね。にゃんこ会の連中は半グレとかよりは相当ましだから、別に締め上げる必要もないし。大体、この被害者面の坊やたちこそ、この辺で女の子にちょっかい出したり、どうもレ○プまでしてるって話もあって、むしろこっちのほうが調査対象なのよね。考えて見りゃ、この腐れおキンキンを私らが大した理由もなく締め上げるわけにはいかない以上、にゃんこ会放っておいたほうがまじめな人間にとってはおいしいとさえ言えるわ。とはいえ、婦警さんの立場でそれは口には出せませんわなあ。

「わかりました、助けます。それじゃ、とりあえずスマホを出して。あら、ロックしてないじゃない。不用心よ？ で、動画を……」

「あ、動画は見ないで！」

強姦ハメ撮り記念撮影動画がいくつも保存されている。

それも「おレ○プ記念」というフォルダの中に。

それを少し再生して、婦警は頬を引きつらせる。

そして、吐き捨てる。

「ば————っかじゃねえのっ!？」

何を見られたのか、ヤンキーたちは即座に察する。コミュ障ではやっていけないのがヤンキーの世界だ、すぐ喧嘩になってしまう。ある意味ヤクザ世界と同じである。

「おまつ、動画！」

「スマホに入れてんのかよ!？」

「お前入れてないの!？」

「入れてるけど！」

「はいはい、続きは署で聞くわー」

「ち、違う、それは知り合いにもらったもんだから！」

「あんたら五人逮捕な。ほかの仲間の事も教えてもらうから」

「だ、誰が吐くかよ。女ごときの尋問だよ」

その「ごとき」からの急所攻撃でなすすべなかったヤンキーが吠える。

股間を押さえた情けない姿を、腰に手をやって半笑いで見る婦警。自分は絶対そうはならないという余裕と自信に満ちた半笑い。

「あらあ。根性には自信あり？ でもねえ……やっぱ無理よ。あなた、男の子だもんね」

「え」

「男の子には、そこを女の子に狙われたらどうしようもない……大事な大事なボールくんがあるじゃないの？」

「あははは、先輩のボール責めはきついよボク？ なんてって彼氏さんのタマタマをエッチのたびに……」

そんな女しか居ないのかよ！ という突っ込みは誰も口にしない。

ヤンキーたちに、そんな余裕はなかった。

「ひ、ひ……あ、助けてくださいお姉さん！」

「あーん？ 姉貴、こいつら」

「終わり切ってんなあ。あっちに頼りこっちに頼り、よっぽど楽な人生送ってきたんだな。婦警さんたちは性犯罪には厳しいから覚悟しとけよー覚悟しとけよー。ちなみにうさぎ県は検察も裁判官も女の子だけだから」

「あはは、よくこんなところで性犯罪やるねえお前ら。っていうか、性犯罪自体やってんじゃねーって話っすけどね」

「う、うるせえヤクザのくせに」

「あー、姉貴こいつら」

「またもや言ってしまいましたなあ。というか、私らに助けてもらう気はなくなったんだ？」

どうせ助ける気はない瑠香であるが。

というか、助けようがないだろう。

婦警らの注意は強姦魔のヤンキーたちに移っていた。彼らの玉を蹴ったらしいという女ヤクザたちは、むしろ**いいことをした**としか認識されない。

挨拶もそこそこに、引き上げる秋実たち。

ヤクザであるから、あまり警察と一緒にいたくはない。心臓に悪い。

「あー、なんかわけわからないことになったっすね」

「だな。というか……今は特に何もしてないが、婦警といると不安でかなわんわ。男だったらこういう場合、ほら」

「あ。ボールが縮むみたいですね。一ミリもわからない感覚」

「**ビビったら体が縮む**ってお前、意味わからんわな。玉ヒュンとか」

笑いあう巨乳の女ヤクザ二人。

横を通る黒ランドセルの少年が顔を赤らめる。

——ええ、こんな若い綺麗な女の人が、玉の話してる。信じられないよ。っていうか、オッパイ大きい……

チラチラ横を見つつ歩いていく。心なしか腰を引いて。

「あは、今の子、反応してたっすよね？ かわいい」

思わずチラリと振り返る秋実。

それに対し、年上女子は大胆だった。片手を口の横に当て、叫ぶ。

「ボク、おチン○ン大きくなってるぞ！」

「ええ！？」

振り返り顔を真っ赤にする少年に、満面の笑みの瑠香。

「くー、かわいいわ！」

「かわいいっすけど」

——この人ショタなの？ 今の言動ヤバくねえか？ 子供いる人が……

幼い娘二人。よく友人を家に連れてくるという。モテるらしく、男児ばかり。

——その母親がショタというのはなかなか危険な香りがするわ。まあ、**悲しい臭いがする**よりはましかな。

わけのわからないことを考えつつ、先輩の後をついて歩く。

体験版終わり

この後、秋実はデブオタ彼ピとの未来のため、

おしぼりの配達を地道にやり、セクハラ店長に金責め、

そして半グレのアジトに突っ込んで金的奇襲という無茶苦茶をやります。

秋実の玉責め任侠道を製品版でぜひお楽しみください。